

ALA・米国図書館研修 2015 報告



2015年6月23日(火)～29日(月)に行った研修ツアーで訪問した、ALA年次総会と各図書館の様子をご紹介します。

ALA年次総会は毎年6月に開かれています。2015年は、サンフランシスコで開催されました。本研修では、サンフランシスコでの総会のほかにシアトルを巡り、計6カ所の図書館を視察しています。

本研修には35名が参加し、図書館や大学、企業からと図書館を支える多彩なメンバーでの研修でした。現地のライブラリアンとのミーティングや見学では、様々な視点から意見交換がなされ、刺激的な7日間となりました。

Report 1 ALA年次総会2015 American Library Association

広い展示場に電子書籍・什器・保存機器・遊具等700以上の企業や団体が出展している。出版社のブースの盛況ぶりはけた違いで、ひときわ目をひいた。



2,000以上のフォーラムやセッションが開催されており、各自が関心の高いテーマを選び聴講した。

*ALA講演の聴講はオプションです。詳細はお問い合わせください。

- ツアー参加者が聴講した講演(*一部)
- Using Digital Media to Cultivate Innovative Thinking in the Classroom
 - Aligning Learning Spaces with Pedagogy: The Instruction Librarian's Role in Classroom Re/Design
 - Librarians Without Borders: International Outreach

本研修の参加者へのオリジナルセッションでは、ALA関係者らによって3つのテーマのセッションが開催され、講師を囲むでの質疑応答も活発に行われた。

■ "War Ink" プロジェクトを通して考える図書館の社会的意義

プロジェクトの立ち上げから携わる Jason Deitch氏によるセッション。

"War Ink"は、公共図書館と米退役軍人省の職員との連携プロジェクトで、ALAが図書館のアウトリーチに最も貢献した取り組みに贈る"2015 John Cotton Dana Award"も受賞。退役軍人が市民生活に戻るための支援を行っている。退役軍人が自らのタトゥーについて話す様子をマルチメディアで記録・発信することで戦争体験を共有する場を提供している。

→ "War Ink"サイト <http://www.warink.org/>

■ ARL(北米研究図書館協会)「LibQUAL+®(ライブカル)」

ARLが開発した大学図書館の評価ツール。日本でも翻訳され使われている。図書館を構成する3要素「人とのかかわり」「場所としてのよさ」「情報管理」の観点からWebアンケートを行い、自館のサービスレベルと利用者の期待値を評価する。セッションでは、システムの背景や仕組みについて解説があり、評価後のアメリカ図書館での取り組み事例も紹介された。

→ LibQUAL+® 日本語説明ページ <http://kw.maruzen.co.jp/contents/libqual/>

■ ALA運営本部 Dowring氏による「America's libraries 2015」

ALAの年次報告書「アメリカの図書館 2015」をもとにした、アメリカの図書館業界のトレンド情報についてのセッション。アメリカの大学の62%が、場所としての図書館の改革を考えており紙資料の書架スペースをラーニングcommonsなどの学習スペースへ移行する傾向。

一方で予算が年々減額され、図書館員は限られた予算の中でプログラムやスキルの向上に努めているという。公共図書館の97%ではテクノロジーに関するプログラムを実施しており、情報技術に関するスキルがより重要となることなどが語られた。



〈2015 研修行程〉

6/23
(火)

成田国際空港発

シアトル着



シアトル公共図書館

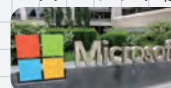


6/24
(水)

ワシントン大学



マイクロソフト社図書室



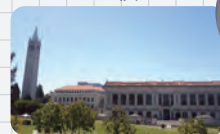
6/25
(木)

スタンフォード大学



6/26
(木)

カリフォルニア大学
バークレー校



サンフランシスコ公共図書館



6/27
(金)

ALA年次総会



6/28
(土)

サンフランシスコ発、成田国際空港へ

6/29
(日)

成田国際空港着



Report 2 視察先の図書館の様子

大学図書館（公立／私立）、公共図書館、企業図書室を訪問。各訪問先では、施設やサービス、電子化への対応など現場のサブジェクト・ライブラリアンやスタッフからレクチャーを受け、質問や意見交換を行った。

シアトル公共図書館 The Seattle Public Library

市民に開放された図書館運営

市民の要望に応え、解放的・透明的なデザインの施設となっており、フロアごとに強い個性を感じた。ミーティングルームのみのフロアは、赤い壁と曲線的な構造から通称「心臓」と呼ばれる。5階のMixing Chamberは、色々なアイデアをミックスして利用してほしいと考えられた。従来の静かな図書館を脱却した「やかましい図書館」を目指していて、企業や個人に対し積極的にスペースの貸し出しを行っている。図書館の運営はファンドや友の会が大きな役割を果たしており、三者の好循環が図書館を活性化させている。



ワシントン大学 University of Washington

歴史と先進的なアクティブラーニングの共栄

〈East Asia Library〉など3館を見学した。中央図書館の役割を果たす(Suzzallo and Allen Library)は、100年以上前に建てられたリーディングルームのほか、2010年に改装されたリサーチcommons、コンサルテーションスタジオなどがあり、学生の意見が多く反映されている。学部生向けの〈Odegaard Library〉は、24時間開館し1日1万人が利用する。アクティブラーニングクラス、ライティングセンターでは、双方向型の新しい授業形式の導入や、年間16000の個別セッションが開催されている。



マイクロソフト社図書室 Microsoft Corporation

企業のビジョンを実現する図書室の役割

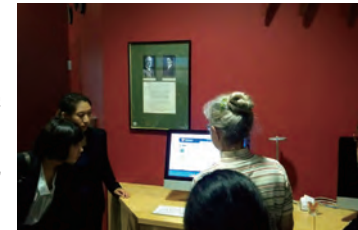
1983年に社長ビルゲイツによって建てられた。「社員が仕事に必要な情報に、常にアクセスできる環境」を整えることが重要という考えのもと、企業ビジョン達成に向け図書室が運営されていた。コレクションは主にテクノロジーとビジネススキルに関する本。紙の資料より電子資料が多い。ウェブサイトの操作性の追求、リサーチデータベースとの連携、社内ネットワークでの広報がきめ細かく行われている。図書室内のMaker Garageでは、社員の発明を支援するため3Dプリンターなどの最新機材が自由に使える。



スタンフォード大学 Stanford University

電子化を積極的に進める私立の研究大学

シリコンバレー形成の立役者としても知られ、学生数3万人のうち6割以上が大学院生である。「紙の本がない図書館」として日本でも話題になった〈Terman engineering Library〉は、電子媒体だけの図書館を目指している。膨大なタイトルがeBookとして利用可能な環境となっており、必要な資料はUSBにコピーできる。学生や卒業生など内部の使い良さを追求する姿勢を強く感じた。徐々に電子化を進める〈East Asia Library〉、学部生向けの図書館である〈Green Library〉も見学した。



カリフォルニア大学バークレー校

University of California, Berkeley

伝統的な図書館サービスを重視する米No.1公立大

州と国が費用を出し合って設立したカリフォルニア大学システムのうち、バークレー校が一番歴史がある。蔵書は1,000万冊以上。図書館の運営ビジョンは極めてオーソドックスで、ラーニングcommonsにはごく一部を除いて対応していない。中心にお話しを伺った〈East Asian Library〉は、米国議会図書館に次ぎ国内で2番目に日本語資料を所蔵しているため、外部研究者が多く訪れる。スタンフォード大学とは対照的に、外部へのサービスを意識していることが伺えた。



サンフランシスコ公共図書館

San Francisco Public Library

多文化を受け入れ、新たな発想を生む場づくり

移民が多く、多文化都市であるサンフランシスコ。図書館の各階には多文化に対応した多数のセンターが設置され、すべての市民の情報拠点となっている。アフリカン・アメリカン、中国人、ゲイ及びレズビアンセンターや、芸術・音楽、ビジネス・科学技術など分野ごとのものもある。様々な人が利用する館内は活気に満ちていた。〈THE Mix〉は、10代の利用者を呼び戻すために改装されたティーンズコーナー。Maker's studio、Audio Boothを備え、アイデアの発想や共有を支援している。

